かたつむり

紫陽花の花が咲いていた。青い色のほうだった。どうしてこんなに咲いているのだろう、と思った。がくん、と揺れて車に乗っているのを思い出した。

「あじさいだ」

声に出すとなく呟いたら、前の助手席に座っていたおかあさんがびくん、と少し背中を伸ばすようにして振り向いた。今まで眠っていたみたいだった。

「起きたの？」寝起きの嗄れた声だった。

「うん」

どこに行くんだっけ、と思った。寝呆けていてなんだかまだ夢の中みたいだった。紫陽花がいっぱい見えたのだけ覚えていた。あれは夢の中のことだったかな。

「紫陽花ね」おかあさんが居住まいを正しながら、こんどはいつものきれいな声で言った。窓の外を見ると一面の紫陽花だった。青い色のやつだ。

「青いのね」

「向こう側は赤いのだぞ、ほら」

黙って運転していたおとうさんが助手席越しに反対側を顎で指した。言う通り向こう側は赤い紫陽花だった。おかあさんはそっちを見ていた。体を起こしておとうさんの頭の横から前を見ると、真っ直ぐ

な道の両側に片方は赤、もう片方は青の紫陽花が一面に咲いている。なんだかとても奇麗で不思議な風景だった。

急にさっきまで見ていた夢を思い出した。

私は庭にいた。うちの庭なんだけれど、うちには庭なんて無いし変だな、と思いながら赤い鼻緒の小さい下駄を突っかけて飛石の上を滑べらないように渡った。飛石の回りは雨に黒く濡れた砂利と土が曖昧になっててて、下駄で降りるとずぶっとはまってしまいそうだから、落ちてはいけないのだ、と思った。昔、下駄のまま土の庭に出たら歯が思いのほか深く沈んで、そのままバランスを失って前のめりに倒れてしまったことがあって、両手もつけないまま前身泥まみれで、おまけに鼻血まで出して大泣きした思い出があるのだ。

庭の回りには紫陽花が咲いていた。さっき縁側から何気なく外を眺めていたら青い紫陽花の葉っぱのところに茶色い固まりがついているのが見えて、じいっと見ていたらまるで時計の針が動くのを見ている時みたいに回りの景色がぼやけて、なんだか目が回ってきたけれど、確かにその茶色いのはゆっくりゆっくり動いていたのだ。かたつむりだ、と思った私は、他の人にみつからないうちに捕まえようと、こうして出てきたのだった。

今日は滑べらずにうまく歩けた。紫陽花は色のついたポテトサラダみたいにこんもりしていて、それが幾重にもなっているから、ここでの見え方は縁側からのとは全然違っていた。縁側を振り向いて、さっきの場所から見えた葉っぱの位置を確認した。大体の見当をつけて、飛石から気を付けて降りた。なるべく土の固そうなところを選んで歩きながら、葉っぱを一つ一つ調べていった。かたつむりの乗ってる葉っぱは無かった。あんなにゆっくり動いていたのに、私の歩くのがもっとゆっくりだったのかな、などと思いながらこんもりした紫陽花を掻き分けるようにして調べた。

葉っぱを掴んで更に奥に、と行こうとしたとき、感触より早く声がでた。

「きゃ」

ぬるっとしたものが指先にくっついている。くっついている、と思って気持ち悪くなって、もう一度声を、今度はなるべく静かに上げた。膝ががたがた震えているのが分かった。大声をあげて走り出したかったけれど、みつかったらやばいし、また転ぶかも知れないから、どうしようもない。うううううう、と変な声を出しながら葉っぱをひっくり返した。

かたつむりがいた。

離れた指を追いかけるようにして、ぬるぬるした

胴体の先のほうに二本の触角みたいな目が復活した。自在に形を変えるのがなんだか不思議だった。裏返した葉っぱを手の平に載せて観察した。半透明の黄ばんだところに茶色の筋の入った大きな殻を重そうに揺らしながら、体を滑べらせていく。さっき復活した目の下には小さい触角のようなものが二本ついている。体の揺れに合わせるようにして、ゆーん、ゆーん、と目を揺らす。体と同じ色で、どこが目なんだか分からないような変な目だった。

縁側のほうで声がした。驚いて振り返った。おかあさんみたいな女の人と、おとうさんみたいな男の人がちゃんと座布団を敷いて座っているのが見えた。私はみつからないように紫陽花の中に体を隠した。

「海が」「海に」「そうすれば」「あの子も」

「今度の」「仕方無い」

そんな言葉が途切れ途切れに聞こえてきた。私を捜したり呼んだりしているのではないようだった。

指先にぬるっとした感触が再びあった。かたつむりが指先にぶらさがろうとしていた。ひっ、と声を上げそうになって、息を呑んで、必死に葉っぱを払い落した。葉っぱが落ち、続いて絡み付いたかたつむりが力なく、ぽとり、と落ちた。二、三歩後ずさってがさがさと紫陽花が音を立てた。私はそっと縁側を振り向いた。誰もいなかった。おかあさんみたい

な人もおとうさんみたいな人も座布団さえもなかった。今まで誰かがいた形跡はなかった。縁側から降りてきたそのときのままの空気があるばかりだった。

そうだ海に行く途中だった、と気が付いた。

「海？　海まだ？　海」

まだぼんやりした頭で私はそう言って体を起こした。

「まだよ」前の助手席に座っているおかあさんが振り向いて言った。「やだ、寝呆けてるの？」

私は、あれ、と思いながら何度も目を擦った。また寝ちゃってたのかな。窓の外には一面の紫陽花が咲いていた。さっき見た景色だ。となりに誰かいるのに気付いてびくっとした。弟だった。すーすー寝息を立てている。なんでびっくりしたんだろう。

「うーん」

何かよく分からないからごまかした。

「もうすぐだからな」

運転席のおとうさんが前を向いたまま答えて、車がほんの少し軋んでスピードを上げた。おかあさんが一瞬おとうさんのほうを見るのが見えた。さっきのきれいな優しい声とは裏腹の、なんだか怒ったような強張った固い表情だった。おとうさんもそれに気付いたようで、少しだけおかあさんのほうに首を振った。鼻の頭だけ見えた。

私たちの乗った車は紫陽花畑の中の一本道を走ってゆく。道の向こうの空は曇っていて、台風でもきているのか灰色の雲が渦を巻いていた。車の中は静かだった。

海に行くのは楽しいことなのに、どうしてか私はあまり楽しくなかった。おとうさんになにか話しかけようかな、とも思ったけれどおとうさんもおかあさんも黙って前を向いていて、話しかけにくかったから、私は紫陽花を眺めていた。

「知晶、着いたぞ」

おとうさんの声で私は目を覚ました。あれえ、と思った。また寝ちゃったみたいだ。

「海着いたの？」

「海はまだだよ。ちょっと休憩しよう」

おかあさんもシートベルトを外していたので、私はドアを開けて外に出た。海の匂いがした。そんなに強くない風が吹いてて、眠気が覚めた。反対のドアから降りた弟の後ろからおかあさんが歩いてくる。おとうさんも降りてきた。

ドライブインみたいな奇麗な家があって、かき氷の旗が風に揺れていた。私は走り出した。そんなに暑くないのにおばあさんが団扇であおぎながらぽつんと立っていた。私は立ち止まっておかあさんを振り向いた。

「ほらあ、そんなに走らないの。また転ぶわよ」
私はおばあさんのいるドライブインのほうに向いて歩き出した。おばあさんが私たちに気付いて笑顔で手を振った。後ろのおかあさんのほうを見て軽く会釈して、それから弟を見てまた笑顔で手を振った。
「いらっしゃい」
「こんにちわ」私はおばあさんに御辞儀した。だぶっとしたワンピースみたいな服は青い紫陽花の模様だった。優しそうな感じのいい人だったからか私は勝手に言葉を続けた。「あのね、海行くの」
「そお。こおんな天気になっちゃって残念だね」
「おかあさん、おかあさん、かき氷だよ。ほら」
おかあさんは肩から下げた茶色のバッグからお財布をだしていた。買ってくれるのかなと思ったら、
「さっき食べたばかりでしょ、おなかこわすわよ」と言っておばあさんに「すいません、暖かいものありますか？　この子おなか弱いんです」
おばあさんは怪訝そうな目でおかあさんを見ていたけれど、すぐ笑顔になって、
「夏なのに冷えるものねえ。中にお入り。お茶淹れるから。さ」
と中に招き入れた。
おばあさんが怪訝そうな目をしたわけはおかあさんの服装だと思った。会社に行くときみたいな黄色

のスーツにハイヒールも履いている。あとからやってきたおとうさんも普通の背広を着ている。さっき海に行くのだと思ったけれど、海にいくのじゃないのかも知れない。なんだか恥ずかしいみたいなへんな気持ちになった私は黙ってあとに付いた。やだなあ、まだ寝呆けてるのかなあ、と思ってると弟が袖を引っ張った。

「かき氷、いいじゃんねえ。ぼくも欲しいのにさ」

「さっき食べたでしょ。おなかこわすわよ」

おかあさんの真似をしたら、さっきのへんな気持ちが少しなくなった。

暖かいコーヒーに砂糖とミルクをたっぷりいれて飲んだ。家じゃコーヒーは大人の飲物ですと言って飲ませてくれないのに、なぜか今日は買ってくれた。少しにがかった。

「潮の香りがしますけど、海は近いんですか」

おとうさんが少しぎこちない調子でおばあさんに尋ねた。

「ああ、その道もそっから下りになって、急なカーブがあるけど、それ越したらすぐだよ」おばあさんは私の頭くらいの大きなやかんでお湯を注ぎながら答えた。「そこの外、ほらすぐそこっからよく見えるよ。展望台になってる」

おばあさんは急須を持ってテーブルにやってきた。

「おたくら、海、行きなさんの？」
「見に行こ」
弟が急に椅子から降りて私の袖をひっぱった。私はコーヒーの紙コップを持って立ち上がった。さっきおばあさんに、海に行く、と言ったのを思い出してへんな気持ちがまた沸いてきた。「海見てくる」おばあさんのほうを見ないようにして何気なく言った。
「気を付けろよ」
おとうさんが後ろから声を掛けた。
「大丈夫じゃん、ねえ」がらがらがら、と硝子張りの引き戸を開けながら弟が言った。「わあすごい」
忙しく手まねきする弟にせかされて、私も展望台に出た。さっきの雲に切れ目が出来ていて、そこから光の筋が何本も差していた。その光を受けて海の表面がきらきら白い粒みたいになって光っていた。
「晴れてきたね」
私はやっぱり海に行くんだと思って弟に話しかけた。
「けどね、海はこっから見てるほうがいいよ」
「え」
へんなこと言うなあ、と思って横をみたら弟はいなかった。どこ行ったんだろうと思って辺りを見渡したけれど見あたらない。さっきのおとうさんの言

葉を思い出した。硝子戸の中を見ると、おとうさんの姿はなかった。おばあさんもいなくて、おかあさんがちょうど立ち上がったところだった。心臓がどきどきしていた。

「おかあさん」

喉がからからで声にならないまま引き戸を開けて中に入った。こっちを見たおかあさんがぐらぐら揺れて見えた。どうしたの、と言いながらこっちに近付いてくる。弟が、と言おうとして弟の名前が思い出せないのに気が付いた。弟がね、いなくなっちゃったの。

「弟ってなに？　知晶？　ちょっと大丈夫？」

抱き寄せられて椅子に座らされた。おとうさんを呼んでくるわね、というおかあさんの声が震えているのが分かった。おかあさんは車のほうに出て行った。

私は独りっ子だった、と気が付いていた。じゃあ、あの子は一体誰だろう。

いつまでたってもおかあさんは戻ってこなかった。まだ心臓が震えている。私はテーブルに手を付いて立ち上がった。車まで行こうと思っていた。早くしなくちゃ。海に行くんだもん。硝子の引き戸を開けると、駐車場に車はなかった。

「あらあ、まだいたのかい」

おばあさんが奥から出てきて、声を掛けた。ぶるぶる震えながら私は振り向いた。きっとすがるような目だったと思う。おばあさんは何か言おうとして、私のうしろから駐車場を見て、もう一度私を見つめた。

遠くから、どおん、と響く音が聞こえた。

「大変だよ、大変だよ」

低い声で呪文でも唱えるようにそういいながら、おばあさんは海へ降りていく道のほうに駆け出して行った。

それからね、私は紫陽花の道にいるの。さっきと反対で右に赤い紫陽花、左に青い紫陽花が咲いている道。青いほうがおとうさん、赤いほうがおかあさん、って思うの。指の先にぬるぬるした感じがしてね、みるとかたつむりがいるの。たぶんどこかの葉っぱから自分で捕まえたんだろうけど、前みたいに恐くもないし気持ち悪くもないの。じっと見てるとね、かたつむりも私を見ているみたいに、ゆーん、ゆーん、って目をこっちに向けてね、必ずそこで目が覚めるの。